

第2回 斐伊川河川整備懇談会 議事録

日時：平成 21 年 9 月 17 日(木)

15:30～16:30

場所：出雲市民会館

■開会あいさつ

開催にあたり、国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所長よりあいさつ

■規約の改正について

懇談会委員である斐川町長職務代理者吉田稔副町長から勝部勝明町長へ委員変更の届け出があったことから 9 月 17 日で規約の改正を行うことについて了承。

■意見交換

【A委員】

- 治水 3 点セットということを強く意識させられた現地視察であったと思う。次回は下流部の宍道湖、大橋川、中海の視察となるが、本日は上流部のダムと中流部の放水路など今後話題の中心となるものを見ていただいたということで大変意味のある視察であったと思う。
- 私自身も何回か現場を見ているが、随分進行し、治水の姿が見えてきたなということが率直に感じたところである。

【B委員】

- 現地視察資料の P6 に斐伊川で重要な土砂の問題について資料が記載されているが、その資料の堆砂量や堆砂率は、現時点の数値なのか。
- 日登堰堤は一度満砂してまた動いたと認識しているが、何年かおきに堆砂量が測られ、上流からの生産土砂量を推定するようなデータはあるのか。
- それぞれのダム等の堆砂状況がわかれば教えてほしい。

【事務局からの回答】

- 堆砂量は 5 年 1 回程度実績を計測している状況であり、2005 年に調査した結果を記載している。各ダム等の堆砂状況については次々回以降提供したい。

【A委員】

- 志津見ダム等の堆砂量は周辺のダムの堆砂量等から想定するため、データをよく調べて、土砂の面から下流の河床の状況とあわせて次々回の懇談会で示せるようお願いしたい。

【C委員】

- 斐伊川が天井川であることがよく理解できた。
- 河床低下による取水の問題があり、農業用水等に非常に困っておられるということもよく理解できた。ただし、治水からすると河床低下は、より安全側に近づいているのではないかと思う。グラフを見ても平成 11 年から 18 年ではそれほど変動していなくて安定傾向にあるということがわかった。
- 取水という水を利用するという面から考えると治水と利水の均衡化を求めることが非常に難しい問題であるのではないかと思う。

【A委員】

- 取水については、現地で斐川町長から話があったように、地元にとって非常に大事な問題である。したがって、河床がどのように変動しているかということが議論の中心になければならない。
- 構造物の安定性と取水の問題との関係からすれば土砂の問題が大事なので、平成 18 年洪水等も含め、特に近年どうなっているかがわかるように提示していただきたい。

【D行政委員】

- 志津見ダムは、100%近く工事が進んでおり、もうすぐ試験淡水が始まる状況で 3 点セットの一部が進んでいないことに対して、ダム事業によって、移転を余儀なくされた方も非常に残念に思っておられる。
- 先日、ダム計画に同意をした当時の町長が亡くなられ、弔辞を述べさせていただく中でこれまでの歴史、経過をみたところ、当時の県知事も何度も現地へ足をお運びになり、また、松江市、出雲市からも再三の協力要請があったわけで、大きな目を見たときに必要な事業であるということで当時の町長が決断されている。
- 3 点セットということで、ぜひとも当初の思いが達成できるように早く進めていただきたいという思いを強くした。懇談会においても 3 点セットを中心とした斐伊川流域の治水が進められ、この水を利用した豊かな住民生活が築かれることを願っている。
- 川上に位置する町なので、綺麗な水を流さなければならないと思っていた。また、ダムを中心に考えていたが、取水についても本当に苦労されていることを実感した。放水路についても技術的・環境的な問題があり、いかに水を治めるかが大きな問題であると改めて確認ができた。

【E行政委員】

- 3 点セットの全てが揃って、初めて平成のオロチ退治ができるのではないかという気がさらにした。
- 子どもの頃、鉄穴流しで、いつも斐伊川の上流が茶色というか赤い水が流れていたことを思いつつ、一刻も早く治水、利水に対して安全で 50 年、100 年に 1 度の大き

な洪水等にも対処できるようになればよいと思っている。

【F行政委員】

- 尾原ダムは、当初の計画が出されてから半世紀経とうとしており、いよいよ来年度で完成という大詰めを迎えている。
- 放水路についても大変大規模な工事が行われるなど、いわゆる3点セットの工事を目の当たりにして、本当に感慨深く思った次第である。
- 何とか3点セットが円滑に進み、当初の目的が達成され、この流域のみなさんの安心・安全とこの水を利用したさらに豊かな県民生活ができることを願っている。

【G行政委員】

- 先ほどから出ているように、出雲市より上流の首長のみなさんより、当市においても早急に整備してほしいということがあり、市議会においても質問があったことから、市長から「開府400年以来水害に悩まされている都市構造であり、市民の安全・安心を守る上でもどうしてもやらなければならない問題で、上流のみなさんのご苦勞や懸念に対しては十分理解しながら事業再開に向けて鳥取の方も含めて一緒に進めていきたい」という話があった。
- 政権交代により大橋川の改修はどうかかわからないがどう考えるかという質問が市議会ですくさん出た。私どもとしてはダム・放水路ができて松江市内は浸水することによって変わりがないため、むしろ、いついかなる時に浸水が起こっても不思議でない全く無防備な状態であることから、早期に改修をして浸水対策を図りたいということをして議会のみなさんにも市長が申し上げたし、その気持ちは変わっていない。
- 斐伊川本川で利水の話があったが、宍道湖に入ると農業用水や飲料水等に利用できないため、湖部では親水性や生態系ということから市民の目移ることから次回の視察時にそのあたりを説明したいと思っている
- 流域の話をしているときに中海沿岸の方は斐伊川本川に対して、斐伊川本川沿川の方は宍道湖、中海に対して意識がちょっと薄いのではないかと改めて思った。

【H委員】

- 斐伊川の中流部の船津地区では、敷地を嵩上げしている集落があった。一方で、すぐ上流でも過去に浸水被害を受けているが、そういったことをしておらず、住む位置を山側にするなど、同じような集落で同じような浸水被害を受けている地域で家の建て方が違うという点が興味深いと感じた。
- 水辺の学校では地域の子供たちが遊んでいたり、旧神戸堰の土木遺産にもなるかのような美しい建造物を見たときに、地域の人々から愛される川づくりが必要であると感じた。

- 尾原ダムで移転された方と残られた方がおられたが、そうなる元々のコミュニティーが分断され、コミュニティー活動や防災活動などに苦勞されているのではないかと思ひ、3点セットなどの大規模な事業を進めていく裏では、地域の人々のそういう協力が不可欠であると感じた。そのときに定礎の石に刻まれた「水の恵み、すべての人へ」という言葉がいいなと感じた。

【I 委員】

- ダム工事に伴ひ、地域外に移転された方の割合が多かったことにショックを受けた。せつかくの工事がその地域を衰退させるような原因になってしまつてはならない。これから先、松江市内でも移転という話があるかもしれないが、その場合そこに住んでおられる方が中心部から郊外へ出てしまうことになる、中山間地とは違ふ「街中の限界集落」という問題が生まれてしまう。そうなるのはならないということを強く感じた。
- ダムをつくる場合においても、その後の活用あるいはその地域の人々の生活再建という問題を単に工学的な問題だけでなく地域づくりという点からも考える必要があると思ふ。しかも工事が長期間にわたることから、工事前、工事中、工事後の生活再建の問題についてフォローする必要があるのではないか。そういった意味で気になったことはダム事業で移転された方々がその後どうなつたか、その後の生活が果たしてどうなつたのか追跡調査のようなものがあれば知りたい。
- 放水路について、基本的には洪水時しか使わないということで、あれだけ広大な土地を普段は何に使うのかと素朴な疑問として感じた。有効活用する手だても考える必要があるのではないかと思つた。
- 前回の懇談会であつたこの工事は松江市のためだという発言に疑問を感じていたが、決して松江市だけのためではないということをもつた。やはりきちんと我々は流域全体のメリットとなるように考え、位置付けていく必要があると感じた。

【J 委員】

- 様々な面で斐伊川水系に携わつてきたが、現在までに治水・利水の工事が進んだことは素晴らしいと感じた。一方で、今後は環境面をいかに検討していくかということが大切であると思ふ。
- 志津見ダム、尾原ダムでは環境モニタリング検討委員会がつくられて、今後の環境の変化をモニタリングするということなのできちんとやっていただきたい。また、放水路についても今後の環境のモニタリングをきちんとやっていただきたいと思ふ。
- 次回視察する宍道湖・中海についても治水、利水とあわせて環境、そこに住む生物を忘れてはならない。どうしても治水、利水が先行するかもしれないが、事前調査も十分されているが、今後も工事中や工事後の環境モニタリングをぜひお願いしたい。

【K委員】

- 河川の低下による影響として、安定取水対策を考えていただきたいという意見があったが、具体的にどのような対策が可能なのか、現時点でその考えがあるならば教えていただきたい。
- 安定的に取水するということに対し右岸頭首工では2つの点が重要だと思う。1点は河床低下によりヘッドが確保できないという問題が現実には起こっているのだと思う。2点目は、右岸頭首工の位置である。みお筋でないこの位置で取水を行うことは至難の業である。そのための工夫として砂堰が設置されている。資料には河床の低下に伴い砂堰によって水寄せをしていると書いているが、本来の砂堰の意味は多分みお筋と反対にあるのでいかに流水を持ってくるかということである。そういう意味では斐川町長からの要望は水理学的にあるいは施設工学的に非常に難しいことであるが、どのように要望に応じていくか考えがあれば教えていただきたい。
- 伊萱床止はひょっとするとパイピングが進んでいるのではないかと感じた。もし、パイピングが進んでいればその対策を考えることが重要だと思う。
- 前回の懇談会でも申し上げたが、構造物をつくることと現在ある構造物をいかにうまく大切に使うかということが今後の大きなテーマだと思っている。現況の今ある施設をどうやって有効利用するかあるいは長く大切に使うかという観点での検討が必要ではないかと思っている。
- 旧神戸堰は、歴史的遺産だと思うので、生物の多様性と同様に、何らかの形で残せないものか検討していただきたいと要望する。

【事務局からの回答】

- 伊萱堰の現状や改修履歴等については、あらためて資料を提示する。
- 取水の問題については、河床低下が原因ではあるが、基本的に取水を確実にする、取水施設をつくるということは一義的に利水者が対策をとるべきであるが、利水者だけで対策を行うことは、困難なところもあるかと思うので、利水者等とも話をしながら協力していきたい。しかし、現時点では対策のイメージは全くないので、今後話を聞きながら検討することになると思っている。
- 参考までに、分流堰では、同様の河床低下の影響があり、どの程度の河床低下を見込むかという検討を行っており、河床が100cm低下しても対応できるような施設として設計している。

【A委員】

- 治水面や環境面において、これほど土砂の移動が重要な川はない。通常治水の問題は水の量が議論の中心であるが、斐伊川は普段から大量の土砂が動いていて、それが取水問題も起こしているし、治水上の問題も起こす。また、土砂が環境をつくる上で非

常に大切な役割を担っているところもあるので、適切な斐伊川の管理を行っていくためには、土砂の問題をしっかりと見極め、整備計画レベルの議論であるが長期的にどうしていくのが重要でその辺りを意識して議論することが必要だと思っている。

- 斐川水系において、放水路のもつ意味は非常に大きい。もちろん3点セットでダム、放水路、大橋川改修を当然やっていかなければならないが、とくに模型実験にかかわった放水路をみた率直な感想は狭いである。洪水時に最大 $2000\text{m}^3/\text{s}$ を放水路へ分流するが、私の経験から流量に対し、川幅が狭く、地域事情など苦勞した結果、あの幅でいかざるを得なかったのかなということが率直な気持ちである。そのため、本当はもっと川幅が広い方が洪水に対して安全であるが、コンクリートで護岸をして流速を速めて水位を下げ、洪水を流そうとしている。計画論としては $2000\text{m}^3/\text{s}$ をぎりぎりで流すことができるということになっているが、放水路に洪水が入ったときに安全に洪水を流下できるように維持管理していくことは大変厳しい問題である。したがって、3点セットのうち2点が出来たからこれくらいでいいという話にはなかなかならないと感じた。整備計画規模では十分に流し得るだろうが、いつ大きな洪水があるかわからないということを考えておく必要があり、計画どおりできたからよいということはこの川ではなかなかないということを自分の専門の方からみて感じた。もう少し、安全率、安全性というものがどの程度確保されるのかというものを含めて議論する必要があると思う。
- 床止をつくってきた経緯について、砂防ダムをつくったから、床止もつくってきたという説明に聞こえたが、すでに7割の土砂が貯まっている箇所もあり、本当に砂防ダムとしての役割として機能するのか疑問である。床止や砂防ダムでの土砂の扨止、出ている量などを粗々でも捉えることが必要である。
- 環境が非常に大事であるが、斐伊川の環境は土砂が運ばれてくることによってつくられている環境が相当部分であり、そういった視点からも川の安全性とともに、環境、利水というものを極めて一体的に総合管理を行わなければならない典型的な例であると感じている。

【J委員】

- 湖の環境面の立場から発言すると、宍道湖や中海には砂の流入が必要である。砂によってシジミやアサリ、サルボウの漁場ができるということで湖の環境にとっても浅場、砂というものが非常に大切だと思っている。
- 漁協関係者からよく聞く話であるが、尾原ダムの試験湛水期間に斐伊川からの流量が減少することを心配しており、平常時に入ってくる水が減少するのではないかと言われる人もいる。維持流量は流されるということなので、今後いろいろな機会を通じて、繰り返し、漁協に説明していただきたい。

【A委員】

- 各委員からの要望、率直な意見を受け、必要な資料を委員へ提示し、議論の上、合意を得るということでまとめていきたい。
- 各委員から事前に調べておいてほしいことなどを受けるためにも、総合的に議論するのか、治水、利水、環境にわけて議論するのかタイムスケジュールを示していただきたい。

■閉会のあいさつ

閉会にあたり、国土交通省中国地方整備局河川部河川計画課長よりあいさつ

以 上